

ここに置いた。間もなく大学南校に欠員が出来たので、彼は雀躍してこれに転じたのである。

第二節 大学南校より米國留学時代

大学南校の起源は徳川幕府の蕃書調所である。蕃書調所は後に洋書調所と称し、更に開成所と改まり、維新の際朝廷がこれを収めて再興し、明治二年大学南校と改称せられた。南校の称は、当時漢學専門の昌平校が万世橋畔に大学東校と称していたのに相對したものである。当時教育行政の官庁を大学といい、その主腦の文部大臣に當る者は大學別當、次官に當る者は大監と称し、大學別當には松平春嶽、大監は加藤弘之がこれに當つた。明治四年別當制は廢されて、文部省の創設となり、大木喬任は文部卿に、江藤新平は文部大輔となり、大に教育制度の刷新に志し、大学南校の大學を削つて單に南校と稱し、程なく東京第一番中學となり、翌々六年さらに開成學校と改稱し、明治十年東京醫學校を合して始めて東京大學となり、十九年これに工部大學校を加えて帝國大學としたものである。

小倉処平は東上後大學南校に入つたが、いくばくもなく擢でられ寮長となり、次で大學権大丞となつた。小藩の一年學生が一年ならざるに擢でられてこの要職に就いたというのは、蓋し副島種臣、加藤弘之等有力者の推輓に由つたのではあるが、またもつて彼の力量の非凡であつたことがわかる。

小倉は大いに校風の改善を企て、貢進生の制を建議し、官の容るゝところとなつた。これが明治三年である。この新制度は、全國の大小藩から學力品行の優秀な學生を貢進生として入校せしめ、これに文明の新教育を授けて國家有爲の人材を養成せんとの趣旨に出たもので、これに依り三百二十有余名の貢進生を全國より得た。後年名を成した當

時の重要な貢進生中には、小村の外に、田尻稻次郎、園田孝吉、木下小吉郎（後に広次）、石本新六、古市造次（後に公威）、斎藤修一郎、入江次郎（後に穂積陳重）、杉浦重剛、原口要、河上謹一、伊沢修二、高平小五郎、三浦（後に鳩山）和夫、高橋健三などがある。これ等總計三百二十有余の青年が貢進生として全國より新帝都に集合し、何れも藩の留守居役の附添で初めて大學南校に參着した際の扮装は或は結髮佩刀の武者修業然たるもあり、或は紋付羽織袴にて散髮分梳の代診然たるもあり、黄八丈の貴公子風なるもあり、背裂羽織に馬乘袴なるもあり、羅紗地の戎服なるもあり、千姿万様、當年の世態を描いた一奇觀であつた。まさに彼等は姿こそ千姿万様であるが、いづれも明治新政府が己の愛し子として育成せんとする官僚の卵に外ならなかつたのである。

彼等貢進生は、何れも南校の寄宿舎に入つた。學力は各生の間に懸隔があつたので、その各程度に應じ、學科別で十幾級に配屬せられ、上級者はウエルソンの万国史、クワツケンボスの究理學の類を學び、下級者は初歩讀本、單語篇、習字帳等を習ひ始めた。小村は員外生の長谷川芳之助等と共に英學正則第八等の甲組に入つて、日夜切磋砥励、暮月にして業大いに進んだ。前首相の高橋是清も、當時英學科の教師で「K-n-i-f-e」、これはクナイフと読むのではない、ナイフと読むのです」などと教えたもので、彼もその教え子の一人であつた。

序でながら當時大學南校には、右の貢進生以外に、別に本校生と稱する元の開成所以來の學生など三百有余名が居つた。これら各種學生の學業操行は、程度相異り、玉石混淆の觀があつたので、その後校制の改革、學生の大淘汰など行はれ、約六百名の學生中の約半数の比較的優等生のみが在校を許されることになつた。淘汰されたものの中には蕃書調所、開成所以來の學生もあれば、貢進生もまた少からずあつた。

恰も其の頃、詳に云へば明治五年三月、明治天皇には一日南校に臨幸し給ひ、授業を廻覧あらせられた。其の際は洋服の制未だ宮廷に成らず、陛下の御扮装は唐冠、白無垢衣、紅袴、木履の御姿であつたそうである。

大学南校が開成学校となつてから新に法学部、理化学部(以上英学)、鉱山学部(独逸語、諸芸学部(仏学)の四学部が置かれた。この新制の下に法学部に入つたものは、小村の外に鳩山、菊地、斎藤、穂積等の九名で、席次は、毎回の試験に於て鳩山を首とし、小村がこれに次ぎ、以下大略右の順次を交じなかつた。その後各科に級長を置くことになり、小村は法学部の級長に選ばれた。級長は月若干の手当を受けるので、時には級友を菓子などに均霑せしめることを得た。

各科の学生は、概ね校の寄宿舎にあつて日夕起臥を共にした。斎藤修一郎氏が晩年子弟に語つた所を輯録した「懷旧談」は、当年の学窓の状態を描写した得難い資料であるが、その寄宿舎生活を叙した中にいう。

『当時にあつては大学生となり、又この校規の正しい寄宿舎に起臥するということは、書生社会に於ては最も幸福な境遇であつた。寄宿舎は由来通弊も少くなかつたが、一度改革があつて以来監督その宜しきを得、又寄宿生も選抜の上に選抜したことであるから、東京の悪空気に誘惑せらるゝような薄志弱行の徒もなくいづれも切磋琢磨の功を積み、他日有用の材とならうと猛勇精進して居るので、この寄宿舎生活は最も学生に取つてその宜しきを得たものである。総て規則は兵隊組織のようになつていて、寝食起臥いづれも嚴格に時間の規定あり、運動時間、勉強時間も常に同窓相携えて行動を一にするので、風呂屋の二階の姐さん達をつかまえて串戯をいつたり、評判のよくない下宿屋の娘に給仕をして貰つて下らぬ世間話などをするような機会もなく、実に徹頭徹尾若い者同志の寄合いで、舎長或は塾頭などの先輩の薫陶の下に勉強する他、いづれも浮世の悪風に染むこともなかつた。殊に当時の舎長には井上毅、小倉処平、九鬼隆一、浜尾新、出浦力雄など人格識見共に当代の俊傑を上に戴き、常にその教化を受けていたので、その利益は

実に莫大なものであつた。我等九人の同窓は、いづれも法律専攻で、その想を同うし、その方針を等うして親しく交つた。又理学部の方では、今日なお友情昔日の如き古市公威君、南部球吾君、長谷川芳之助君、杉浦重剛君等があり、室は異にしていたが、同じ屋根の下で同じ食卓で飯を食つた間柄、互に相往来し、議論を戦わし、寸時も學業を怠るようなことはなかつた。』

しかも当年の才子神童たりし寄宿舎生活のこれ等学侶の間には、無邪気なる惡戯、吹き出すような珍談は積んで山をなした。後年威儀儼然と構うるに至つた大官紳士も、昔に溯れば破帽弊衣、豆を嚙り薯を喰ひ、喜々として相語り、相歩し、相戯れ 論じ、そしてその間になせる惡戯蜚行中には、よく一代の性癖を示して余蘊なきものがあつた。

「大学々生溯源」といふ書にはこうある、「小村は他の学生に劣らず、かなり惡戯好きであつたが、しかし性質が恬淡で、同じ惡戯にしても執拗とか陰險とかいう風が見えなかつたから、彼の学識才幹と相俟つて同学間の敬愛するところとなつた。後年彼が社会に出るや貧窶徹骨、頗る憐むべき境遇にあつた。従つて飲食店に行つても、彼は他人をして私をなさしめ、客が来ると客の煙草をのんで平気でいるという有様であつたが、人間かくして他の嫌忌するところとならないのは稀であるのに、彼は依然として一種の人望を同人間に保持したのは外でもない、人々が彼の恬淡な性質を愛したからである。およそ当時年少赤貧の割合に同学中人望の多かつたこと、小村寿太郎の如きは少かつた」と。

小村はその先輩小倉処平に励まされ、孜々業を怠らず、学識才幹疾く嶄然頭角を同窓の間に抽んだ。殊に彼は長崎で多少英語の素養を得た。大学南校を経て開成学校に入つた後も、教頭フェルベック以下英文教師のハウス、グリフヒス等に就いて熱心に修習に努めたので、一兩年ならずして学力は著しく進んだ。特にハウスは誠意と温情とをも

つて全力を学生の指導に傾倒し、愚々功々その知能の啓発に熱中するの概があつたので、学生はいずれも仰いで師父となし、小村の如きも彼の最も厚い薫陶を受けた一人であつた。しかも小村は天資頭脳極めて明晰で、他生の如くに刻苦精勵しないでも講義の要領を捉うるに長じ、寧ろ昼間迅速に復習予習を了えて夕刻には他生の寮室に來遊するを常とした。これがため彼は学友の間に夙に「小村バット」(蝙蝠)といふ渾名があつた。

同窓の諸生は、その専攻するところは同じでなく、法理工等各その志す学科に向つたけれども、終生の理想は孰れも治国平天下にあつた。明治維新の大業は白面書生の手に成れり、吾等一朝風雲に会さば、身卿相となりて国政を料理する易々たるのみ、とは彼等共通の抱負であつた。特に小村は年少ながらも志操堅固で、ただに學業に優秀であつたのみならず、青雲の志もまた頗る大きく、好んで時事を論じ、征韓論の破裂を聞いては一大内乱の來るは避くべからずと断じて非凡の眼識を同窓の間に認められ、又一夕級友の前に政党論なる題を掲げて堂々たる政治演説をしたことなどもあつた。蛇は三寸にして吞牛の氣ありで、小村は学生の頃から既に小村参議の綽名があつた。参議は今の大臣で、自分でも私かに大臣参議をもつて自任した。当時大隈は参議として盛名飛ぶ鳥を落す勢であつた。小村は一日街頭の写真屋で大隈の写真を買い來り、裏面に To Mr. Komura, from his friend Okuma と書いて机上に据置き、級友に向つて「大隈参議が僕に贈つて來た」と誇示した。後年小村は外務次官として外相大隈を輔佐し、大隈亦省務を擧げてその裁量に委したが、小村は学窓の当年を顧みて多少の感慨なきを得なかつたであらう。

しかも各科の諸生は學業益々進んで抱負愈々大に、進んで欧米に渡航し、先進の大学に研鑽を積むに非ずんば満足しないという氣位があつた。彼等の多くは初めは思想の單純な攘夷党で、ある時教師フェルベックの夫人が帰省を了

えて再び來朝し、その着京を出迎えた彼が夫人と相抱擁し、相接吻するや、その状を目撃した彼等は、これを猥褻の行為と称して憤慨したという程で、泰西の習俗は彼等の眼には夷狄禽獸のそれに映じた始末であつたが、學問進み知識開けるに連れ、百事欧米先進国に若かざるを得し、遂には進んで實地の見學を欧米に試みると欲するの情熱抑え難きに至つたのは、蓋し自然の趨向として怪むに足りない。

彼等は學業進むにつれいずれも海外留學の志望に燃え、如何にかしてその目的を達せんと日夜苦心したが、同志の一人古市(公威)は、旧師辻新次を訪うて大にこれを談じた。辻はその精神を嘉し、たゞ官の留學生は一人の情願をもつてその効を奏するのはむずかしい、須らく同志團結してそれを要請するのでなければ駄目だと語つたので、古市はその暗示に力を得て早速小村と斎藤、長谷川、安東を同志に加え、いわゆる五人組を作り神田鎌倉河岸のある安料理店を本陣として時々集會し、斎藤は筆を執つて一片の海外留學建白書を草し、五人の名でこれを田中文部大輔に差し出した。当時彼等が如何に其の運動に熱心であつたかは、『大学々生溯源』に記する所、以て其の一斑が解かる。

五人組の熱心と來てはえらいものであつた。殆んどこの問題の爲めに百事を抛擲して顧みざるの有様で、鳩首凝議、早晨以て夜更に及ぶことは決して稀れでなかつた。而して建議文を提出するは固より、広く各方面に亘りて政府要路者を訪問し、以て目的の達達に力めた。土曜と日曜とは留學運動の爲めに費すのが彼等の常習であつたが、或土曜日の午後、長谷川と斎藤と二人で時の文部大輔田中不二麿を芝伊皿子に訪問したことがある。処が田中は彼等が來訪の意味を察して居たので、如何にしても逢おうと言わない。そこで斎藤は「僕は又出直す」と云つて歸つて了つたが、長谷川は歸らずに其の足で品川の一妓樓に泊り込んだ。そして翌朝未明に起出で、篠突く雨を冒して田中訪問に出掛けた。然るに長谷川の風采が余程珍妙であつたので、途中交番の巡查に見咎め

られ、厳しき訊問を受けた。長谷川は逐一有りの儘を話した。処が巡査も大に彼れに同情を寄せ、近所の車屋に案内して、車屋のお神さんに彼れの濡れた衣物を乾かさせなどし、種々親切な言葉を掛けて立ち去つた。長谷川は思わぬ処で親切な人々に逢つたのを幸いに、この車屋を本陣として三たび田中を攻め掛けた。而して田中は逢わなかつたさうであるけれども、之を見て当時五人組の連中が如何に留學問題に熱心であつたかが解かる。又其の頃、一日蓮沼で陸軍大演習行われ、陛下には行幸を仰出されたことがある。当日開成学校では小村、長谷川、古市等所謂五人組の連中が発起となつて休校運動を初めた。蓋し「戦争のことは歴史の科で早くより、屢次教えられているけれど、實際には未だ曾て之を目撃したことがない。然るに今回幸に演習の制度布かれ、戦争と同じことを為す由であるから、後学の為め見て置きたい」というのが小村等休校運動の理由であつた。彼等は此の理由を提げて時の監事浜尾新に逼つた。併し浜尾は「学校を休んで迄之を見る必要はない」と言つて聞入れない。発起者の重立つた者が入り変り立ち変り、浜尾の室へ行つて嘆願すれども、諾き容れない。そこで今度は学生全体で押掛け、浜尾の室えはいれるだけはいつて、浜尾を威圧せんと試みたけれ共、如何にしても諾き容れない。結局学生の方で根氣負けして了つた。併し浜尾は頑固は頑固であるが、決して不靈の男でない。学生休校運動の理由が全然無意義のものでないことは十分認めているから、文部省に掛合つて其の日の午後から休みにした。於是乎實際演習を見に行つた者もあるし、最早遅いからと云つて外え遊びに行つた者もあるし、又自室に閉籠て勉強した者もあるが、例の五人組の連中は時の文部會計課長小松某を訪問して留學運動をやつた。斯く言つて了えば何でも無いが彼等が休校運動をやつたのは、実は学校を休みにして其の暇に留學運動を為さんが為めであつた。即ち敵は蓮沼にあらずして東京にあつたのである。其れを如何にも演習を見に行くが如くに装い、学生の牛耳を執つて騒ぎ立てた小村等は流石に外交家なりし哉。

政府は遂にその運動の熱心に動かされ、結局請願を容れることとなり、試験に依り十名を選抜し、第一回文部省留學生として海外に派することに定めた。法学部より選に入つた者は小村と鳩山及び菊地の三名で、斎藤は第四席の故

で選に洩れた。彼はその不当を先輩に訴え、鳩山排斥文を草してこれを上司に呈した。官遂に彼を加えて法学部留學生を四名と改めた。

さる程に明治八年七月、法学部の小村及び鳩山、菊地、斎藤、理化学部の長谷川、南部、松井、工学部の原口、平井、諸芸学部（註）の古市、鉱山学部の安東、合計十一名、いずれも文部省留學生を命ぜられた。これ等十一名はいづれも高遠の抱負と前途の希望とを胸底に藏め、欧米に發程することとなつたが、その際同船の海外留學生中には、右十一名の外、慶応義塾の高嶺秀夫、同人社の神津仙三郎、及び師範教育研究の伊沢修二などゝいた。

小村等留學生一行が出發して二箇月後の明治八年九月には、朝鮮半島沿岸を測量中の我が雲揚艦が砲撃を受けた所謂江華島事件が勃發した。政府は対内的な考慮もあつて強硬策を執るに一決し、黒田清隆、井上馨の両全權を派遣し、軍事的な示威の下に、翌九年正月日韓修好条規を結んで列強に先んじて朝鮮を開国させるのに成功した。此の条約は当時本邦の甘受しつゝあつた不平等条約を逆に韓国に負わせたもので、明治四十三年第二次小村外相時代の日韓合併に至る我が大陸政策の端初の一步であつたのである。

さはあれ彼等文部省留學生は一旦ニューヨークに着した後、各その志した方面に向い、古市、安東等は更に歐洲に渡り、余は米國に於ける予定の學校、すなわち鳩山はコロンビア大學に、菊地と斎藤はボストン大學に、そして小村はハーヴァード大學に入つた。ハーヴァード大學の規程としては、外國から来て留學するものは先づ本科に入るのを常則とし、直ちに本科に入らしむるは例外であつたが、小村がその例外の殊遇の下に予科の一箇年を履まないで直ちに本科に編入されたのは、その母校たる開成學校の當時大いに誇りとしたところであつた。

當時文部省がその留学生に支給した学費は二百五十弗の渡航旅費は別として年額一千円で、米貨に換算して約六百弗となるが、衣食住より書籍文具に至る迄皆この中から支弁するので、固より余裕ありとは謂えない。監督の目賀田はこれを年四回に分け、三ヶ月分あてを各本人に交附することにしたが、彼等の多くは右に受けて左に散じ、三ヶ月の学費は一ヶ月を支えず、前貸の請求、増額の請願、頻々到りて監督を手古摺らしたと後年目賀田は時折笑つて語つた。

小村がハーヴァード大学に入つてから一年程経つて、金子堅太郎もまた同大学に入つた。そこで兩人は下宿を共にし、特に間代の節約を計つて共同の一小室を賃借し、昼は一個の机、夜は一台の大型寢台を共用した。

ある時兩人共眼病に罹つて、医者から燈下読書を当分廃せよと戒められた。金子は小村に、「日没から就寝まで無為に蟄居するのも興が無い。僕は他日外交官となろうかと思うから、夜は出でて大に社交を學ぼうと思う、君も一しよに來んか」と。小村は常に言を左右に托して応じない。一夜金子は深更歸り來たつて室に入れば、小村は長椅子に横わり天井を眺めつゝ思索に余念がなかつた。「君は何を考えているのか。」「僕は近頃黙想の妙味を悟り、昼間書籍にて相親んだ古今の賢哲を夜間腦裡に呼び來たり、暫くこれと相語つていると興味愈々加わるような心地がする。」小村は晩年に至る迄時あつてか冥想思索に耽ることがよくあつたものである。

小村は在米三年の学窓にあつて、余暇あれば大学の図書館に立籠り、専心読書に耽つて日月の移るを知らぬ風であつた。当年米国の文士ホーウェルスの「アトランチック・モンスリー」誌に掲げたハーヴァード大学參觀記に、「図書館の一隅には、端坐して黙読する黒髮青顔の一少年あり、鷹揚閑雅、高士の風を帶ぶ」とあるが、小村の精勵風格は疾

く參觀者の注意を惹いたのである。彼はその學業に於ても、素行に於ても、先進国學生の間に伍して始終好評を繋ぎ、特に頭腦の明晰は大いに彼等を驚嘆せしめ、我が文部省留學生の先達たるに耻じざる好印象を同大学に留めた。留學生監督の目賀田も、學生として挙措沈着、意志堅実、威儀の自然に備わつたものとしては、小村が第一であつたといひ、賞嘆措かなかつた。

明治十一年六月、小村は同大学法律学科の業を卒えた。彼の考では米国の大学課程は概して幼稚で、學理の蘊奥を究めんと欲せば須らく更に英独の大学に遊ぶべきであり、實地に通曉するには出でて訴訟の實務を視ねばならない。自分は寧ろ訴訟の實務を視、法理の適用を學ぶのを得策とすると、斎藤、菊地等これに賛した。

斎藤の「懷旧録」に

『鳩山は更にエールに転校して大学院の學生となり、卒業の後ドクトルの称号を得て帰朝したが、小村はそのような必要はないといひ、菊地も余も小村と同意であつた。何故というに、昨今の亞米利加大学はいざ知らず、当年の米国大学なるものはなお幼稚で、深く専門の學科を研究しその蘊奥を極めるには不適當で、独逸の如き校風を見ることは出来なかつたので、寧ろ得業生の免状を受け、直ちに弁護士の見板を名ある弁護士の事務所につけ、實地に研究した方が万事につけて得策であるといふので、余はその方針を取り、時々某弁護士の代理をして裁判所行きなどして実地の研究を専らとしていた。』

とある。そこで小村は率先この方針を執り、先づニューヨークに往き、米国の前司法長官で當時弁護士として名聲のあつたビルポンドの門に入り、その事務員として時々法廷に出入し、訴訟の實務を見習ひ、大に獲るところがあつた。蓋し小村の在米同窓の金子は、彼れ自身の語りしところの如く、夙に外交官たるの志望を抱いていたが、遂に外

交界に入らなかつた。小村は当初は外交官たらんとの希望を有せず、その志したところは弁護士として世に立たんとするにあつた。そして同じ弁護士でも、小村の期したところは法廷で弁論を闘わすコート・ロイヤールよりも、訴訟の鑑定、按排、構成等を主職とするいわゆるチャムバー・ロイヤールとならんとするにあつた。先考は小村を技工たらしめんと欲し、小村は自ら弁護士たらんと欲し、一旦司法官となつて志を得ず、転じて翻譯従事の一微官となり、再転三転して後年世界の一大外交家として名を歴史に留むるに至つたというわけで、人生の行路真に逆踏すべからずである。

明治十二年の春、大警視川路利良は官命を帯び、渡欧の途次米國を過ぎた。当時前述の如くニューヨークで訴訟の實務を練習しつゝあつた小村は、川路のために通訳の勞を執り、その警務視察を助けたこと少くなかつた。翌十三年初夏、小村は業成り米國を辞するに際し、歐洲を觀んと欲し、英國に渡り、数週日滞留した。たまたまロンドンで河上、菊地、南部、原口、松井等同窓の学友と落ち合い、毎夜ウィスキーを煽つて大言壮語、時には談論夜を徹したこともあつた。彼は次で大陸に渡り、仏國留学の同窓古市と共にマルセイユ港より乗船し、印度洋を経て同十三年十一月恙なく歸朝した。時に齡二十有六であつた。

小村は歸朝の直後、先づ両親を飫肥に省した。その際郷人は挙げて窃に小村の洋行歸りの風采を想望していたが、県の南港細島に上陸後三十里の道を多くは徒歩で郷土に入つた彼は、身に綿服を纏い、足に木履を穿ち、時計を袂の中に無造作に入れ、絶えていわゆる洋行歸りに往々見られるが如き輕佻浮華の風がなかつたので、郷人相伝えてその質撲眞摯を称嘆しないものはなかつた。

小村は歸省後、直ちに小倉処平の墳墓に展した。小倉はこれより先き明治四年の春、学制取調の官命を帯びて英國に赴き、六年冬征韓論破裂の報を聞き國事を憂えて急ぎ歸朝したのだが、翌七年二月佐賀の乱となり、江藤新平等が敗れて飫肥に入るや、処平は厚くこれ遇し、潜に船を雇つて土佐に遁れしめた。その後東上した小倉は西南の風雲急を告ぐるに及んで、歸郷し、その途次豊後より南日向の形勢を視、官軍の守備極めて稀薄なるを察知し、機乗すべしと見、薩摩に往てこの方面突撃の利を説いたが、桐野一派は一挙熊本城を屠るの自説を固持して降らず、彼れの意見は容れられなかつたが、去就を薩軍と共にし、飫肥隊を率いて豊日の間に転戦した。けれども十年八月延岡が官兵の占領に歸してより形勢頗る不利となり、彼は熊田の戦鬪に負傷し、八月十七日可愛嶽の役で事の為す可らざるを知り、臼杵郡安井村に退いて自尽した。享年三十有二であつた。

西南の役は明治政府から閉出された保守反動士族の不平の爆發であつたが、同時に新政府唯一の財源であるが故の高率な地租の過重にあえぐ農民の一揆、あるいは上流の民権論とは云え勃興しつゝある自由民権派の反政府勢力にとつて、薩摩の強大な武力は注視的であつた。政府はかかる重大な情勢に対処して、先づ十年正月地租を五厘輕減して二分五厘となし農民の反抗を慰撫した後、遂に勃發した西南の乱を全力を挙げて鎮圧した。その士族的並びに反政府性に於て絶大の同情を西南派に寄せていた民権派は、最後の武力的拠点が脆くも壊滅したのを眼前にみて再出發を試み、より広い民衆のうちに其の基盤を求めて行つたのであつた。小村が後年小倉を評して「小倉さんが今生きて居られたならば、大隈さん見たようだろう。小倉さんも随分議論家であつた。今居られたならば、確かに大隈さんに負けずに長広舌を振廻わして、民権主義を唱えられたことだろう」と言っているが故なしとせぬ。

小倉は夙に意を経世の學に用い、先憂後樂の国士として郷党の畏服を受け、徳望自ら高く、同輩呼んで飢肥西郷と称した。彼は少年子弟を訓育するについて、よくその長を伸し、短を矯むるに留意し、剛柔寛嚴常に宜しきを失わなかつた。小村が少壮の時から既に性格識見の秀でたのは、殊に小倉の感化に負うところが多い。小倉の炬眼また夙に望を小村の将来に囑し、指導誘掖到らざるなく、小村の上京後程なく熱を患い床に臥するや、彼は憂慮措かず、特に當時の大医淺田宗伯に投藥を請い、看護に寢食を忘れること骨肉も真に及ばない程であつた。小村の当年健康に復し、後年名を成したのは、その一半は実に小倉の賜である。明治三十一年、小村の駐米公使として任に赴かんとするや、同県人は小村のために祖筵を催したが、司会者の三好大審院長（退蔵）は小村に対する送別の辞の中にこういつた。

『私は飢肥に一人の知己を持つていた。その知己は私が生涯に於て最も尊敬し、且親愛する一人であります。不幸にして今や幽冥相隔て、已にこの世の人ではありません。今日私等がこの会の主賓としてここに送別の杯を舉ぐる小村公使を指導し、奨励しておられた公使の無二の先輩は、只今申し上げました私の知己なる小倉処平であります。小倉君は、小村君が漸く大学の素読を初めた位の幼時から、已に君の将来に嚮望しておられたことは、小倉君自身の口から私は聞いたことがあります。小倉君は、小村君のために先輩であり、親友であり、恩師であつた。云々』

これは確かに彼に對する知己の言であつた。小村と小倉とは、その恩愛師弟の關係実にかくの如くであつた。今や小村は米国の留学を了え、歸り來つてその墓前に伏し、悵然默禱、暫し起つ能わざりしという、真情察すべきである。処平は二子を遺した。小村は世に出た後共にこれを扶養し、聊か恩師に報するの志を致したのであつた。

第三節 司法官時代

小村が米國留学を卒えて歸朝した當時は、恰も自由民権の時代思潮が全国的に昂揚していた際であつた。明治政府の所謂有司専制に對する土族的反抗であつた西南の役の壊滅後、自由民権運動もより広汎な地盤の下に再出發し、十三年四月には二府二十二県八万七千人の請願人総代の名の下に、国会期成同盟会は「国会を開設するの允許を上願するの書」を提出し国会の早期開設を要求した。有名な酒屋會議の指導者である植木枝盛は明治十四年「それ国家とは何ぞや、人民ありて然るのちに立つものにあらずや。国家の憲法とは何ぞや、人民の自由權利のために設くるに非ずや。けだし人民は先なるものなり、国家は後なるものなり。民権は主なるものなり、憲法は客なるものなり。」と書いたが、かゝる全民衆の参政要求の昂揚に對し、明治政府も十四年大隈を追放すると共に、国会開設、憲法制定の勅諭を渙發し、民権運動の尖鋭化を回避するの止むなきに至つたのである。かゝる際に自由民権の本場たる米國より新たに歸朝せる小村を囲んで新知識を聞かんと欲した旧友等は一夕小村を招待した。席上衆盛に權利を説き自由を論じたが、小村は「諸君の論する所、孰れも權利自由の主張に詳であるが、而も義務ということに至りては一言の之に及ぶものなきは奇である。」と言つたので、一坐大いに小村の着眼に服したとあるが、流石に文部省留學生の名に恥じなかつたと云うべきで、官僚の卵としての資格は充分であつた。

彼は歸朝の翌月即ち明治十三年十二月、初めて司法省雇を拜命し刑事局出仕となつた。司法省に入つたものが司法官として鰻登りに榮達するのを見ることは珍しくはないが、後年全然別の方面に飛び出て、大いに驥足を伸すに至つ